

## 囚牛庵漫筆：雑録

著者	園田，春耕
雑誌名	龍南會雑誌
巻	9 5
ページ	4 9 - 6 7
発行年	1902-11-20
その他の言語のタイトル	囚牛庵漫筆：雑録
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5404">http://hdl.handle.net/2298/5404</a>

# 囚牛庵漫筆

一、戀と美

園田春耕

戀の研究は、誰にも興味ある問題なるべし。「戀は偽なり」とふ命題は、今往東西に等しく、其神聖論と共に説かれ、明にせられたる戀の二大事實なり。少しく西歐の藝術に眼を注ぎし人は、誰れも戀の神聖なる於母影を認むるなるべし。されど「戀の偽」てふ意義は、通俗に二様の異なる側面を有す。勿論、偽に二様の別ありといふにはあらず。戀に誠無し」と解するは、其寧ろ惡き一面觀なり。「戀は眞實ならじ」と説くは、他のむしろ善き一面あるべし。

吾人は、我國の文學に戀の神聖を認むるは、容易の事に非ずといふ——勿論皆無との謂にはあらず。之れ戀の通性なれば、是國にも無くて叶はぬ事實なり。されど戀の偽は彼の國に於ける如く、我文海にも亦著き一潮流を爲せり。「傾城に誠無し」とは、やがて戀に誠なしの謂にあらずや。所謂昔の傾城は、今の娼婦と相比すべきにあらず。彼等は時としては確かに戀の化身なりしなり。此の如く、偽は戀の普遍性にして、殊に戀の眞實に非ずとは、其の神聖と平行して矛盾することなき特性なり。

戀は時に醜なる事あり。されど、多くは古來藝術家の名品を飾る美觀の一なりしなり。殊に其妙機發動に於いて然りき。甚五郎が響の京人形には、人の見て美とするもの以上に、彼に取りて猶一入の美觀は、彼女は之れ戀の化身なればあり。木石を抱いて淺ましき戀を學ぶにはあらず。有繋甘本名匠の天才は、一宵垣間見たる彼女の裡に、忘れ難なの於母影を認めたり。人は天才が鑿の痕の微妙に驚き、其の美しき姿相の調和を賞歎すれども、他の見たる京人形は遂に無精の木偶に過ぎず

と雖ども、彼に取りては精魂ある人影なりき。影なればこゝ舞もしたれ、躍りもしたるなれ。その影の實跡は、彼が廓の夕の垣間見に、心深く銘せられし主觀の彼女が印象に存す。然れど彼ど、彼女の關係知らぬ後の批評家は、彼女と影姿と相比して何とか云ふらん。彼女はそのかみの姿して今にあり。是影猶ほ存すとせば、或は思半に過ぎるものあるや未だ知るべからず。

バイロンの狂熱に、紅ならぬイアンセの白蓮一莖、潔き姿のぬけ出でしは慾にはあらず。彼には珍しき戀の神聖なる片影なり。不思議なるバイロンが妙機に觸れし此の少女を望むものは、誰れも其の俊秀の美相にあてがるゝや、否彼のバイロンが覺えし如く、はた歌いし如く左様に。

色——勿論性慾と異なる——に迷ふものは滔々天下皆然り、されど美にあふるものは眞の藝術家にして始めて之あり。色に迷ふものは戀に偽られざる者なり。或は戀を欺くものとも云ふべし、戀に偽られたる者にして、始めて戀人の美を感ずべけれ、戀人の眞を知るは其の美を認むる所以にあらず。翻而世の戀人てふ者を觀るに、必ずしも凡て天女の天降りし美形にあらじ。されど、秀たる

「チャーム」妖婉たる嬌愛の光は必ず缺ぐべからざる資格なり。「チャーム」の光明は實にキュービットの砦なり。彼の天童が愛箭に射られて能く傷かさるものありや。ありとすれば、哲學の盾か、科學の甲か、いや深き宗教の谷か。否道德の堅城も時に少女の一笑に傾くは、やがて天童が放ちし愛箭の深手に非ずや。只浮世に漂ふ慾の黒雲は、「チャーム」の光明を掩ひて、天童も時に人界に其の砦を失ふ事あれど、極めて稀なり。忌むべく恐るべきは慾の黒雲なり。されど、恐るべくして願はしきはキュービットのいみじき愛の篠箭なり。風姿端麗溫乎として玉の如く、嚴然として日の如く、潤達寛厚大慈悲其の眉宇に溢るると雖も、女菩薩は以つて敬すべく以つて拜すべし、遂に戀の對象と

ならざるは何ぞや。そは菩薩の映象は常に眞實にして未だ客觀の性を脱せず、菩薩は依然とし彼處に留れり。美は即ち美なれども、遂に彼の美たるを免れず。然りと雖も、相思ふ人が感せし戀人の映象は然らず。殆んど其が客觀の衣を脱して主觀の裸躰となれり。此の彰影は、實に戀人の眞象にあらずして、『戀』てふ名匠の斧正を経たる——戀に偽られたる彼女の姿影なり。此姿影こそ「チャム」の後光柔かに薔薇の匂こぼるゝ様なれ。

葡萄より無花果を取り能はざるは、憐れなる吾等人間の力なり。されど醜婦を美人と觀し得るものは、所謂不完全なる吾等人間の特權にあらずや。人間の不完全は、實に天才が自由の翼を伸す空間にして、天童が愛箭の的なり。希臘羅馬の神格は知らず、人はろが不完全なる限りに於いて戀するを得るなり。人格漸く神に近くに從つて、人は此の自由を失ふ。神は眞なればなり。眞を認めずして偽を觀るは、一般に藝術の美を感ずる所以にして、戀人の美も亦然り。人躰の美は凡ての自然に卓越して古今の妙手が天才の技巧を逞ふせしものなり。されど色即是空と觀じ來りては、地獄太夫の妖艶も一体には糞汚を盛りし皮袋に過ぎず。豚に眞珠を投與ふる者は愚なり、されど神に美術を捧ぐる者よりも多く愚なりとは云ふべからむ。

今は予に一段の決論を下すを許せ、神は眞なりされど美は假象に存ず。茲に斷るべしは、予が之まで所謂偽と云ひしも實は假象の義——層精密に假象の遊離を意味せしなり。

今はむかし、エデンの天苑に生りしアダムとイヴを、天上界より墜して下界に降らしめ、其の神格を奪ひ、彼等に人格を賦與せしは蛇なりしといふ。神は蛇を詛へり。然れど、詩人藝術家は彼に感謝せざるべからず。蛇は戀の指導者なりしなり。汝等が戀に負ふ所の名譽は幾何ぞや。而して、戀

は惱めるもの、救ひ苦めるもの、隠場といふに非ずや。且つ世に最も多く悩み苦しむものは、汝等詩人藝術家なるをや。

然らば今、世の宗教家が理想實現の黄金時代到來したりと假定せよ。世界は沒趣味なる天國と變じ、人は戀知らぬ神となり終りぬべし。ろは彼等は趣味を需むべく、また戀すべく餘りに圓滿なればなり。實に『哀む者は福なり、其人は安慰を得べけれ也。』誰か人生を苦界と嗟つものぞ、苦痛は人世の鹽なり、からきは其の味よ。苦痛なき世は安慰なき世なり。もし安慰なき世ありとすれば、ろは如何に沒趣味なるべきよ。不平は人世の興味なり、不足は人生の風趣なり、詩人や藝術家や皆是の不平を母とし、不足を父として、生りし天才なり。最も多く此の不平と不足とを感ずるものは、又た最も多く人世の興味と、人生の風趣とを覺り得るものなり。詩人藝術家即ち是なり。敢而云ふ平等の境には詩歌なく圓滿の界には美術なしと。誰かエデンを樂園とは教ひけん、智惠の木實の味知らぬアダム、イブは未だ苦みの味知らぬ彼等なり。苦の味知らぬ彼等は、亦樂みの味知らぬ彼等に非る無きを得るや。世の所謂敬虔なる宗教家が、蛇に欺かれしものゝ子孫なるを悲む時に、予は却つて之を悦ばせんと欲するなり『爾曹稚兒の如くならずんば天國に入る事を得ず』とは、神の子イエスの誓にあらずや。誠に――吾等は罪の福音を聴き、戀のバプテスマを受けて始めて人間と爲り得るなり。然り而して、人間となるは福なる哉、其人は哀む事を得べければなり。否な其人は美を見る事を得べければなり。されど「天國の實現」と「其の實現を望むこと」とは別問題なり。前者に興味なく後者に之あるは、猶ほ他人の職業を見て面白しと爲すが如し……。

古往今來戀の歴史を讀み、時に之が實例に考へ、密かに戀の動機を觀するに、所詮は戀人の美に

歸納せらるゝを悟るべし。然らば、茲に再度予をして戀人の美は實は彼女の眞影に非ずして、凡ての他の藝術に於けると等しく、又た主觀の假象に在りと、先の決論を繰返し、最後に戀は美感發現の一形式なりと斷せしめよ。實に美は人生の太陽なり、戀は人生の明月なり。彼等は共に無目的なり、普遍なり、先天的なり、神秘なり、盲目なり、絶對的なり、無意識なり。不平なるもの、不満なるものは來れ、來りて心の慰をアポロの神前に求めよ。

## 二、愛と美

愛と美との關係を研むるには、愛の美と、美の愛とを併せ論するを適當とす。即ち愛は美感の對象として如何の價值を有し、又如何に美は愛情の對象と成り得るやの説明なり、されど後者は戀と美との項に於いて略ぼ云ひ盡したれば、茲には愛の美感を論せんと欲す。

物理學の最初の定説たる引力こそ面白けれ。大は無窮の宇宙に充ち、小は極微の原子間にも存せり、仰いで天象を觀、俯して地文を察するに、物常に其處に在りて運移變化殆んど竟り無きが如きも、而かも靜思能く之を察すれば、猶一縷綿々として絶へざるものあり。此の妙力ありて、宇宙の大と原子の小とを結び、よく天地を一体となし、茲に靈活世界を生ずるなり。此の妙力こそ彼の物理學者の所謂引力にあらずや。

翻て吾人々類社會、萬般の行動、組成を觀れば、又實に彼の宇宙引力の如きものあるを知る。小は親子、夫婦、兄弟、姉妹、朋友を結び或は市町村、郡縣の制度を成就し、大は邦家の事より列國間の交渉に至る。その種類の如何、數の多少を問はず、社會てふ社會に、普遍の人類引力あり。然りと雖り人事の複雑多様なる、顧みてその靈活玄現の妙に驚くべし。古來幾億年、宗教は常

に意馬の手綱をとりて、之が狂奔を制し、道德は心猿の械となりて、猥りに放逸を恣にせしめざらんと務めたり。今や文化大に開けて哲學の光明、科學の機械あり。能く人事の運移を圓滑ならしむ。然りと雖も此等の宗教道德や哲學科學や、皆之を已に求めて、之を他人に應せしむべきものなり。もし主客兩体をして、能く相聯絡せしむるもの無からむには、遂にその効を收むる事能はざるべし。而して之が用を爲すものは、予の所謂人類引力なり。此引力ありて始めて人は孤獨にあらずして社會を成し、また能く物と人との聯絡を求むるを得べし。人文發達の動機は實に總て茲に存す。

抑社會に於ける最も簡單なる最初の形は夫婦なり。夫婦あれば家族あり。家族あれば村落あり。種々の階級を経て邦家の一大社會を組織す。故に暫く夫婦の親和力、人類引力を説明せしめよ。

夫婦相和する所以は何ぞ。利乎、欲乎、はた人倫の大道てふ茫漠たる道念か、人もし問ふに、夫婦の必要を以てせば、予は直に、之に答ふるに利と云はん。その屬性の一を慾と云ひ、今日にては第三の道念も一分の勢力動機となるに相違なし。されど此等は果して人類引力の妙力を有し、夫婦親和の靈用を現はし得るや否や。予は之を決する前に、夫婦とは何ぞやの疑問を解かざるべからず。否な予が所謂夫婦の意義を明にする必用あるなり。十七歳以上の男子と、十四歳以上の女子との兩性相寄りて民法の規定を蹈んで、登記し終れば、以て之を夫婦と云ふを得べきか。世の滔々たる法律萬能主義者、辨護士、裁判官等は或は之を夫婦と認むべし。されど予の所謂夫婦とは、此の如きものにあらざるなり。實に社會の一分子としての眞正なる夫婦は、決して此の如きにて足れりとすべからず。

吾人は我國古神代の歴史を讀みて、稷販廬島生成の神話を聞き、之を遠く彼の希伯來神話の創世記

にアダムとイブの傳説とを比較して、少しく撫然たるものあり。創世記に『此こそ我骨の骨、わが肉の肉なれ』と云ひ、『人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一体となるべし』と云ひしものころ、予が所謂夫婦の眞髓なれ。又彼の泰西の詩人が

So rushed, mixed, melted life with life united!

Lips, cheeks burned, trembled soul to soul was won!

と歌ひしは移して眞夫婦間の抒情とするを得べし。予は事實に於いて富を求めて富を得、華燭の典を挙げ、或は人世の所謂義理にからまれ、合歡の式を行ひ、或は煩惱の狗に驅られて、之が満足を願ひし數多の才子佳人を知る。素より彼等の總てが法律的離婚の不遇に至ると云ふにあらざれども、多くは呂律内に合はずして、醜聲外に洩るゝものゝみなり。彼等の或ものは子あり、孫ありて、日々家族的生活を續けつゝあるものさへあるに、猶ほ然る所以は何ぞや。之れ水に油を注ぐの類なり。之が親和を謀らんには、各兩者の分子引力に打勝ちて、ろが個性を破りて一昧と爲す今一層の強力を要するなり。利や、慾や、道念や決して之が缺間を補ひて、靄々たる夫婦の親和を生ずるものにあらず。然らば其二人のものを一体となし、琴瑟相和して、天樂の微妙なる階調を生ぜしむるものは果して何ぞや。たのしみは夕顔棚の下涼み、予は今にして愈々愛の力の大なるに驚く。賤の伏屋に眞の夫婦を見出すものは、其處に愛の光の輝きを認め、金殿玉樓の裡に冷かなる配偶を觀るものは、其處に溫き愛の飲乏を知らむ。愛は夫婦の親和力なり。人類引力なり、愛の力の及ぶ所、人と



人と一体となり、又物と相交るを得るなり。人と云はず、物と云はず、草木、國土、一切同仁にして、能く彼我の境域を脱して精を形態の外に相融和せしむるものは實に愛の力なり。愛の光の照さざる所は、衝突、矛盾の闇黒世界なり。其處に、圓滑なる社會の進運を望むは難し。愛の溫きを待ちて初めて茲に平和の花咲き、文化の實も熟するものなり。火山灰の親和力に乏しき、一陣の微風にも漂々として飛散するを眺め、顧みて現今世界大勢を思ふ時亦た此の如きものあるを認むるを悲む。

世の所謂、文明とは何ぞや。一言にして尽せば科學的研究なり。今や人は科學の奴となり、物は科學の材料となれり。人は汲々として總てを知らんことに務む。智識は今人の目的なり。然れど智識は果して物の本體を了する所以か、少しく疑なき能はず。予は昔時の四大元素か、今日の七十何元素に分解せられたるを見て、確かに科學進歩の道程を認むと雖も、果して幾干か能く今人か古人よりも、より多く事物の本体を觀取せしやを疑ふ。予は世人か、徒らに文明の空名に驅られて智識の進歩を之れ求むるを見て情の教養の乏しきを嘆するものなり、之を古人に見、之を今人に比して、眞に物の本体を了せんものは智に非ず。智は只たその眞相を認むるを得ん。されど眞相は本体にあらざるなり。吾人に此の能力を與ふるものは情なり。そは情は愛の宿なればなり。愛のメディアムを通しては彼の智の明鏡に映せる眞相の秘奥に潜める絶對と直ちに相接觸するを得るなり。人もし孔子の獨乙語を知らず、無線電信の原理を解せず、其他總て今日の科學的説明を知らずとて、彼れを笑はば、直にその笑の反響は吾身を笑ふ聲となるを知らん。『神は愛なり』善哉言や、釋迦や、孔子や、基督や、其他凡古來の聖人君子は皆愛の權化なり。彼等もしその大慈大悲の愛を失はば鹽の味

を失ふが如し。遂に平凡凡々の徒のみ。ソロモンソロモンの榮華も、一朵の野百合に如かざるは何ぞや、彼は智術の發展なれども、之は愛の露かがやけばなり。然りと雖も科學的研究といふも、其處に愛の片影を認め得ざるにあらず。他人の糟粕をなめて古人を祖述するの徒輩は知らず、眞に創始的の思索を廻らして、事物の眞相を窺はんと務むる眞の學者を見よ。前者のライブラリー中の書籍に及ぶる事遠きに比して、後者には實に欽慕すべき暖々の靈氣を認むるなり。且つ前者は却つて萬卷の書を涉獵して博聞強記能く古今の事實を誦んするに、後者は未だ彼の如く然らざるもの往く之あり。しかも彼の枯木死灰の如きに比して、斯の綠葉青々として生氣の充滿せる所以のものは何ぞや。之れ學者の物に對する愛の多少に起因せずんばあらず。冷靜なる頭腦は、今日學者の稱賛する處なり。されど徒らに權利の死法を墨守して、學者の能事終れやせするもの、果して能く事物の眞相を穿ち得るや。如何にこの運用巧みなりとも、遂に生命なき智識なり。活ける書籍なり。彼が人格は實に幾千の價值を有するや、反之彼の一朵の細花にさへ猶ほ深き思想を賦む者は、其人格如何に高き。

To me the meanest flower that blows can give

Thought, that do often lie too deep for tears.

宗教心は先天的の人性なりとは幾度か繰返されたる議論なれども、性善説と性惡説との今も猶ほ道學先生の争点として残れる如く、宗教界の一疑問たり。然りと雖も、宗教も、道德も果して其處に愛の力の助なくして存立し得べきものなるや。人の性を惡とするものも、又之を無宗教的なりとするものも、必ず人の性に愛の力籠るるを認め、且つ不知不識の内に常に、之が指導をあをぎつゝ

あるを知らん、『神は愛なり』とは宗教家が認めたる愛の力、如何に大なるかを示せるなり。

予は人性に必ずしも宗教心の存在と、またその性善とを認むる者にあらざれども、愛の力は必ず之等を成し得るを信するなり、予は十字架上の基督と彼と相並ぶ罪人とを見て、一には崇高敬慕の念を起し、他には憐憫の情をよめる感ずる所以の源を探るに當りて、又其處に大なる愛の魔力を認むるなり、基督に崇高敬慕置く能はざる所以は、彼が神の子なるが故か、あらず、彼が神を信する厚きが故か、あらず、予は神を信せず、元より三身一体の如きは夢想もせざる所にして、神に對する彼が信念の如きは、寧ろ之を迷信となすものなればなり、然らば彼が能く此の慘酷なる處刑の苦痛に堪へしに依るか、之れ或は然らん、されど此の如きは吾が元録の男伊達俠客と稱する輩も猶は能く莞爾として、白刃の下に睡りしを思へば未だ特に以つて賞するに足らず、只々彼が洪大なる人類に對する殉難殉死の愛なり、之の愛こそは實に彼が古今唯一の神子とも崇拜せらるる價值なれ、遠く之れを釋尊に探り、孔夫子に求め、近く之を佐倉宗五郎に、吉田松陰に尋ね、又た日蓮上人ルーテル、ワシントン等古來東西の歴史的事實に照して、愛の凱歌の反響を傳へざるはなく、實に有形無形の人類活動に、或は限り無き生命の息を吸込み、或は單に乾燥無味なる枯木死灰の動搖に近からしむるものは、凡て各個人が有せる愛の力の發展分量の多少に寄るなり。

人の世に處するの道は實に澤にあれど、宗教の教義にも矛盾あり、道德の訓誡にも撞着あり、はた科學の智識にも衝突を生ずるは、個々日々の經驗する所なり、されど予は敢て云ふ、もし世に能く愛の指導に従ふものあらば、凡て此等の不和を排して圓滑なる社會の運轉と人類の活動とを成就し得べきなりと、道は遠きにあらず却つて近きに有り、愚なる母も愛兒の病を知るは却つて醫學博

士に勝ることあるは事實なり、無智の一婦人をして大博士も及ばぬ機微を察せしむるものは實に愛の力にあらずや、而して凡て學問中哲學は絕對の學なりと、自ら稱する處なれど、勿論之をあらゆる他の科學と相比する時に絕對的と稱するを得べし、しかもその認識論の初めに於て猶ほ彼等は如何にするも『予は認識す』てふ假定を許さざる可からず、故に其の目的は絕對なれども、教へんと欲する所は絕對的なれども、未だ全然相對真理の域を脱せざるなり、而して之を説くや凡ての科學と等しく推度的なり。愛の教訓は之に反して直覺的なり、且つ其相對の域を脱する程度に於ても、多く哲學にゆづらざるなり、愛の進程中「予は之を愛す」てふ理由の外何たる前提をも要せざるなり、基督の愛や實に洪大無邊と云ふべし、されど彼はうの大なる愛を注くに當りて何たる理由を要せしか、荒野に迷へる小羊の群を見て彼か起せし情念は何なりしか、彼等が神の子の子孫なればか、あらず、さらば見よソロモンの榮華も野の百合花に如かしと感せしものは果して如何の推度をか爲せし、歸納法乎、演譯法乎、くだくしき世の推度法かな、小さき花に深き思いを悟るものは、獨りウオルツウオルスのみにあらざるべし、此のたどしへなき愛の力ぞ、皆人の有てる平等の心性なれ、徒らに世の俗智に迷ひて之か發展を妨ぐる今の風潮こそ可笑けれ、彼の所謂宗教心の如きは有るもよし無くてもよし、人の性は惡なるも可なり善なる元より可なり、理性の有無の如き又問ふ處にあらず、されど無くて叶はぬものは人類引力なり、之なくては宇宙引力なくなればそが整然たる運行忽に止るが如く、人類の生息は一瞬も續くる事を得ざるべし、此くて人文の發達に之か必要なる、只たうの種類の差異、分量の多少、程度の高卑にこそあれ、人の身心活動は發程に於いて、必ず之が動機を爲すものは愛なり、猶ほ進んで精微の講究細心の研鑽を就け、種々の危險と困難とに打勝

ちて、我々として真理の探究を勉めしむるものも亦愛の指導なり、殊に夫婦に關しては既に説きしが如くなれば、人類社會組織の上に於いて、愛の引力の須要にして、一瞬も缺ぐべからざるは別に特説を要せざるなり。

茲に至りて予は愛の萬能を認めざるを得ず、基督教に於いて神の萬能を説くには、必ず「神は愛なり」といふ大前提を要するなり、實に在地の人間に天上の神格を賦し、非情の國土にも有情の生命を與ふるものは愛なり、愛は人格の改鑄者にして、神格即ち人々の價値の標準なり、世人の稱して徳といふも、必竟愛の世界に於ける發展に過ぎず、大聖の徳の禽獸に迄及ぶ誠に所以あるかな、悲の氷を溶かし、愁の雲を散じ、或は怒の炎を消して不平なるものに平等を與へ、不自由なるものに自由を與ふるものは愛なり。

説き去つて盡さず、實に大なる愛の力ぞ、たとしへなき、吾人は人文發展の歴史を讀んで、古來の英雄豪傑の偉蹟を追懷し、學者發明家の跡を尋ねて、文學藝術の遺寶を探り、靜かに今往の世界を觀察する時、常に感ずるは頼み難き人の心に只だ頼りとすべき愛の陰家なり、殊に最後の文學藝術の界に於いては愛のエーテル到らぬ隅なく充溢せるを認めん、

美は凡ての藝術の目的にして、快は凡ての文藝の對照なりとは、確かに一部の真理を含めるが如し、夫れ美性の描寫は言はすもがな、彼の醜容をうつし滑稽を描くが如きも、孰れか快美感の爲めならざる、而して快美の欲求は人性の自然にして、人皆の自覺する處なり、一部の論者は其の偏狹なる主義の前提より推度して、之を排斥せんと、口に手に務めたりと雖も、心性の自然的發露は其中心に裏斬するを常とせりき、而して此の欲求の滿足を與ふるものはハルトマンの所謂美的假象な

がとは、今日一般に最も妥當なりとせらるゝ所、されど此の美の所在てふ假象の成生こそ疑問なれ、るが或は單純實在論にまれば、はた主觀的觀念論の孰れにあれ、能感の主觀的心性ど、所感の客觀的對境（文藝藝術及び自然）とありて、始めて其處に美感の成生あり、且つ美に對する能感の心性は、先天的に人の有せる萌芽なることは、凡ての論者の許容する處なり、しかも實を間に表現せられては、或は爛熳の花を咲し累々たる實を結ぶあれど、或は花も實も結ばで朽果つるもの少なからず、元よりるの元種に高下の差等あるに非らずと雖も、遺傳と教養と境遇等四隣の事情の之を然らしむるに依る、「天國は華種子の如し」とは移して茲にも亦應用せらるゝ比喩なり、而して實事に於いて人の見て美とする處のものを已は美と感せず、已の美とする處を人は却つて美とせざることあり、されど此の二ツの場合を審に考ふれば、其處に必ず主觀の心性に欠ぐる所あるか、客觀の對境に足らざるものあるを悟るべし、さらばるの缺点不足とは何ぞや、茲に再び予をして人類引力の必要を説き愛の萬能を繰返さしめよ、

人体の美は美の極致なりとは今や世界の定論なるが如し、故に今暫し人体美の成生に就いて愛と美との關聯を解かせよ、何故に人体は美なるやと問はゞ論者必ず先づ答ふるに、曲線の雅麗と、色澤の妖艶とを以つてし、次に表情の精微を説くべし、されど何故に曲線と色澤の價值をしかく重んじて、表情を輕んじたるやは予の聞かんと欲する處なり、吾人は果して單に無意味なる曲線、表情なき色澤に美を感じ得べきや、（實際斯の如きもの存在せず）換言すれば、彼等は果して其自身に價值を有するや、之に對する予の答は只此等の雅麗なる曲線、妖艶なる色澤より成れる形態の、能く人心の精緻微妙の表情に適するが故にして、彼等の價值は利用價值にして決して絶對價值に非ざる

てふ事なり、然らば如何なるも表情は、最能く吾人の美感を惹起し得るや、吾人は天然、或は藝術の人体が美の對境として必ず如何なる表情を要するや、之は事實の証明を用ゐざるべからず、然れど爰に猶ほ先決を要する一問題あり。

因縁ありて結果あり、されど無縁の衆生は齊度し難しとかや、如何に曲線の美、色澤の麗、又た表情の精を極むると雖ども、或一種の道德家俗人は眉を蹙めて几帳に半影を蔽ふの不幸に遇ふ彫刻繪畫の裸体屢々なるは事實なり、之れ所感の對境は技巧の美術たるにもせよ、美感無縁の心性は遂に美感を惹起する能はざるが故なり、之が縁を爲すものは觀者が有せる、天然、或は藝術に對する賞翫の趣味にして、即ち、先例の如きは彼等有せる、道義の愛の、美に對する愛より強大なりし故にして、一方に於いては慾の愛の如何に強大なるやを證するに足るなり、「酒なくて、何の已れが櫻かな」と歌ひし、詩人と櫻花とは、酒の縁によりた、されど愛は葡萄の美酒に勝る感美のミディアムなり、故に見よ、彼の外科醫の療病に對する愛求は、常に彼が性慾に打勝ちて、その手腕を自由に振はしむるにあらずや、彼の性慾の愛求療病の愛に勝れる場合には如何、此の間の消息は時に新紙の三面に洩さるゝ事あり、特に醫學生の墮落、年少美術家の醜聞紛々たる所以は、彼等の志望は、否な其の愛の常に本能寺の敵に傾き易きが故にして、彼等にして、むしろの學ぶ所に忠實に、美を愛する力強大なりしならば、決して他種の學生と墮落の比を異にせざるべきなり。路傍一莖の艸、一輪の花に津々の趣味を見出すものは、科學者詩人、又は牧童なり、已が足之を踏んで顧さるものは行商なり。各其の望む所異なり、愛の發現の相違あればなり、彼の行商と雖も浴後に打眺めたる垣根に、紅白の花を見てはアナうつくしと感ぜざらんや、先きには利慾の愛の美のそれより、強大

にして、今は利慾愛を暫し忘れ居たるによる、再び慾愛の強大ならん日は、又た花の忘れらるる時なり、美の愛なき科學者には、光はスペクトラムと、音楽は空氣の波動と感ぜらるるれども、詩人藝術には然らず、五色七彩のスペクトラムは、殆んどろの色彩の實感を離れて之より惹起せられたる一種の妙感を覺ゆるなり、等しく之れエーテルの振動に非ずや、しかも一つは之を色彩と感覺し、一は之に或他種の感覺を感ずる所以は、エーテルの振動の刺激により起されたる視覺が、愛の色玻璃に達して、或は反射し、吸収せられ、漸く一部は通過して再び其處に分解せらるるによる、之れ子が美の愛は感美の惹起を促すミディアム、即ち所感の因ありて、能感に果を成せんには美の愛の縁を結ばざるべからずといふ所以なり。

右にて吾人の感美資格決定したれば、今は對境の美的資格を説くべき時なり、茲にはろの一なる愛の表情の如何に重要なかを論せんと欲す。

吾人は泰西の秀什逸品を多くは寫真なれ共、翫賞する毎に、童男童女の美に戀々足すんば非ず、微薰の酒、半開の花、二六か二九の對句も舊めかしけれど、青春の美男美女が初戀の句こぼるる愛の露したらん許りなる麗容妍姿！近くは之を我情史の二頁に見遠くは古き希臘美術の消息を聞く時、常に吾人の心私かに羨慕に堪ざる處なり、されど成年期に於ける傾國の美は今更に説くの要無かるべし、

予は童男童女之美を望む毎に、再四たとしへなき愛の力を繰返さざるを得ず、女と云はず、男と云はず、一度慈母の胎内を出つれば、其父母萬腔の愛情は注がれて、彼等の上にあり、且つ人事の多様なる、生れたる嬰兒を見よ、彼等は凡て麗相美態にはあらずるなり、加之彼等の悉くは完全なる形骸をさへ備へざるものあるなり、しかもその父母は等しく彼等を相愛するにあらずや、彼等は



皆渾身、愛の權化なりといふを得べし、されど之は彼等がその父母の愛の名匠に刻せられたる、アイドルにして、之に對する他人の感想は頗る冷淡なれども、漸く或長して誕生を迎ふる一回或は二回に至れば、母を覺へ父を慕ふ彼等の如何に他人にも愛らしきよ、まして其父母に於いてをや、手の觀察にては普通數へ年二歳は他人より、彼等が受くる無邪氣なる愛の初期なるが如し、かくて男は十四五歳、女は十二三歳に至る間、漸々家庭に於ても、外に於ても、その見聞を廣め、經驗と教育とに依りて人間らしく成長して、茲に少女少女の域を脱して、父母より、他人より受くる愛は復た昔日の無邪氣なる清楚たるものにあらずして、意趣深き身心の活動は之より始まり、其處には何處となく初戀の於母影宿れるを認むべし、エデンの禁果を食ひて、初めて人生の苦悶を知るも此時より、樂みの味知るも此の頃よりなり、此期に於ける少女少女の風姿こそ、白露深き池邊に立ちて、黄金なすアポロンの曙光、今將に綻びんとする蓮華を射るの思あらん、幽界の神デイスに見染められしベルセフ<sup>オ</sup>ネエは實に此期の一少女にて、彼の『プラクシテレス<sup>エロ</sup>の愛の神は弱冠の美童にして、今や成年に入らんとする機に際せり』とあるを見れば正に此期の少年なるべし『優しくひびき戀愛の情に慣れず、この道に自信の薄くして自ら薦むる勇もなく、哀れに思ひくつをれたる姿なり。此像の摸寫を見るに柔かき髪の毛の長く卷きたるもたかしく、少しうつむきて斜に睨みたる美童の艶に物恥したるは謂ふべからざる幽婉の趣を含めり』と云へる只此記事を見て想像するだに云ひしらぬ思に胸おどるばかりなり、まして目のあたり『パロス産の大理石、きめ細かなれば春風常に其あたりを吹く如し』といふ古代名匠の遺巧を眺め嶺南の天色婉艷の秀容を仰ぎたらんには、誰か人生の深趣奥意をたのしまざらん、然りと雖ども斯の如きは凡の地に於いて何時にも、何人にも求

めを得らるべきにおちざるを思へば、却つて深く人生の不如意を感じる時に、當り窓前囁々の歡聲湧くが如きを聞けば無翼のエンゼル、鴿の如く遊び戯るゝを見るなり、予は彼等が心身の活動に何たる複雑多様の表情を認めずとも、無邪氣なる渾成の愛の表現は、予をして限なき慰めを感ぜしむ。吾人はラファエルの「マドンナと耶穌」の寫畫を望む時、バツチッとして鮮かなる四個の星眸爛れ、在天の聖父を仰ぐが如き様して、敬虔の氣の眉宇に溢るゝを見て、崇敬するに禁じ難き想はずれば、玉の如き子の稚兒を抱ける、彼女の皓腕にこそ、斯の名什の精致は宿れるなれ、凡ての母の慈愛を集めたる渾身の誠を以て、ヒシと相抱かれたるたさなき耶穌は、實に愛の化身ともいふべきなり、豊麗なる端姿、彼の如きは元よりラファエルの典雅莊重の筆致より少童の美を發揮して餘蘊なしと雖も、吾人は造物主秘巧の靈妙を、凡ての童男童女が天然の風姿に認むるなり。見よ彼等の一舉手一投足、凡て無邪氣なる愛の表現にして、彼等は元より、未だ人生の道德を解せず、宗教を信せず、凡そ之の智藝を知らずして、只々生得の欲求の満足に向つて意を恣にしつゝ、其の天然を發露せるにあらざや、古來の詩人藝術家か其の聖愛淨情の寓意を込めて、之か表現を常に彼等に求めたる、誠は所以あるを悟るなり、今もし彼等より愛の表情を奪はば、凡て下等動物の無意味なる拙線沒趣味なる活動と變し終りて、恐らく何たる美を感ずるものは無かるべし、されど母犬の乳狗を撫するの時、色を忘れず敵に對し、その仔獸の爲めに防禦する時、其處に云い知らぬ壯美威の躍動する華覺ゆるなり、暖乎たる其溫風、嚴然たるその威容、予は彼の動物たるを忘れて、只た聖愛淨情の抽像を認むるなり。

獸身行爲は實人の歡賞する處にして、之か表現は宗教畫の名作、必ず無く叶はぬ一資幣なり、而

して吾人は、諸宗教の典經を讀みて、教文や使徒や信者が殉難殉死の動機を探り、常に面白しと思ふは、彼等かその種々の艱難辛苦に遭遇する時、その心身の慰めには彼等が信奉する他力の信念に負ふ處多しと雖も、その根本動機は決してその信念に存せざる事なり、されば見よ、來世地獄の苦を恐れて、全能の神の御稜威に畏れて、其處に這般の行爲ありとせば、それは未來の俸酬を約して現世に於て勞働するものなり、如何でか之を純乎として純なる獻身的行爲といふを得んや、爰に於いて予は敢て反覆して、必ずその動機は彼等が人類に對する愛の撞動に因する事を斷言するなり、此る動機よりして出でたる行爲にして、眞の獻身的の名實相叶ふものと云ふべし、古來の偽善者と呼ばるるものは、多くは前者に屬して吾人は之を望むでは嫌惡の念をこゝろ起せ、その美的價值は遙かに一母犬の下にあり、予は我國樂の美を探りて、能樂の幽邃なる、箏曲三絃の微妙なる、清元常盤津の俗にして、しかも雅趣ある、各以つて我國風の粹を誇るに足るべしと雖も、彼の淨瑠璃の雅麗にして變化に富み、多趣多様よく人生の萬象を網羅して、人情の機微を盡し、之が特殊の個性を發起しつつ、しかも俗に流れず古汚に陥らず、神出鬼没の技を雅俗の界に錯綜して其巧を極めたる、樂界の天才は吾人の常に欽慕おく能はざる所なりと雖も、之を助けて其の美を完ふせしめし作家の功の偉大なるを賞賛せざるべからず、然り而して吾人が最も能くその美に憧るるは獻身的行動の抒情叙事にしてその動機に愛の分量の多少はやかては吾人が感ずる美感の標準となるか如し、吾人は殆んど愛の表現なき事物や、活動に、美感を動かさるる事なきが如し、されど茲に注意すべきは先天的愛と、後天的愛との區別せられん事なり、甲の表現には、萬人等しく相同すれども、乙のそれは人により少しく趣を異にする事あるべし、親と子との愛、相戀せる男女の愛の如きは前者にして、

果報が因果かいぢらしき武士が主君に尽す、忠義の愛の如きは、やかて後者の好例なるべし、世の宗教家或は道德家等か稱する、所謂善惡邪正の有意的行爲は、一として之か動機の後天的愛の刺激に依らずんばあらず、強盜も、殺人も、乃至は偽りの慈善も、その發程には各特種の質趣を異にすれども、所詮は或一種の愛に起因するなり、しかも或は之を見て興味を感じ美感の惹起を促し、或は却つて嫌惡の念を起して、之か見聞をも欲せざらんとする所以は如何、そは此等凡ての行動は、之を單に所感の客觀的事實として、考ふれば、悉く一種愛の表現なれども、吾人が能感の心性に刺激を受ける迄には、各人特種のミディアムを通過する際、精撰分解せられざるべからず、されど、各人が有せる後天的の愛は必ずしも純一にあらず、此等各種の愛に相應すべく一様に教養せられ居るさるなり清濁并吞ひてふ人物は甚た稀にして、一方に秀でたるは他方に劣るは實世間の常なれば、凡ての後天的愛は必ずしも萬人の美感の對境たるを得ずと雖も、人類に、寧ろ動物に普遍なる先天的愛、其自身の表現、或は之に關聯したる表情には、其の積極たると消極たるとを問はず、悉く吾人の美感の對境たり得る也、

是にて略予は愛か美感の對象としての價值を説明して、終に美感の惹起に就いて下の斷案を得たり、

能感の心性に屬する愛の主觀的存在  
所感の對境に存する愛の客觀的表現

美感。

(十月下旬稿)

